
分身

エンデバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

分身

【Zコード】

Z7592C

【作者名】

エンデバー

【あらすじ】

俺の身の回りで不可解な出来事が起こっていく。覚えのない彼女からの告白。覚えのない強盗殺人事件から、容疑者へ。そして、もう一人の『俺』の存在。様々な謎ともう一人の俺の存在とは何なのか?

暗い、暗い闇の中に俺は立っている。四方を見回しても、暗くてなにもわからない。手を振り回してみる。しかし、周りには触れるものさえなにもない。一体ここはどこなのだろうか？

突然、ぱっと視界が明るくなつた。暗闇の世界から、一瞬にして光の世界に変わつた。俺は反射的に、手で目を覆つた。が、一瞬遅く、目が眩んでしまつた。

徐々に慣れてくると、光の中に、人のシルエットが浮かび上がっていることに気付いた。それは、俺の真ん前に立つていて、手を伸ばせば、触れることができるだろう。だが、俺は躊躇い、手を伸ばそうとしなかつた。

「おっ、お前誰だよ？」

俺は黒い影に向かつて、おそるおそる声をかけた。しかし、黒い影は俺の問い掛けになにも反応を示さなかつた。

「おい、なにかいえよ」

「俺はお前。お前は俺だ」

黒い影はやつと口を開いた。だが、俺にはいつたことの意味がわからなかつた。

「どうしたことだ？」

「そのうちわかるだろ」

「そのうちつて……」「ほんとになんだ？」

「お前自信の中だよ」

黒い影はそういう俺に背を向け歩き出した。

「待てよ。意味わかんないって」

俺は黒い影を呼び止めたが、影は俺を無視し光に向かつて歩き続けた。どうやら、立ち止まるつもりはなさそうだ。

俺の足は、自然と黒い影を追つていた。だが、距離が縮まる気配は一向になかった。むしろ、徐々に遠ざかっているようだ。黒い影

との距離はどんどん開いていく一方だ。俺は走つて追いかけているのに、何故追いつかないのだろう。

しばらく追いかけていると、黒い影は光の中に吸い込まれるように消えていった。それと同時に、俺の周りには暗闇が戻った。先ほどと同じ、ただ暗闇が俺を包んでいるだけだ。俺は、一人取り残されたような孤独感を覚えた。

どれくらい取り残されただろうか、俺は意識が遠のいていく感じがした。その瞬間、この世界から出られる、という安堵が胸の中を支配した。

不快な電子音が響いていた。目覚まし時計を止めるど、まだ眠気の残る目を擦り、重い瞼を開いた。あれは、夢だったのだろうか。黒い影が俺にいつたこと。まるで意味がわからない。

頬を軽く叩きベッドから起き上がると、勢いよくカーテンを開いた。朝の日差しが、部屋に注ぎ込まれる。その後、机の上に出しつ放しにされた数学のノートと問題集を見て、俺はため息を漏らした。それは、今日提出しなければならない課題なのだ。昨夜取り掛かっていたのだが、眠気に負け投げ出してしまった。たとえ投げ出さなかつたとしても、数学嫌いな俺は、おそらく課題をこなすことはできなかつただろう。

教室に入ると、俺は坂倉麻衣のところへ向かつた。彼女とは幼なじみで、小学生の頃から仲がよかつた。小学生の頃は、男とよく外で遊んでいたためか、お転婆娘といわれていた。彼女はソフトボル部に所属しているため、黒光りした肌をしている。ショートヘアの髪の毛は茶色がかつていて。

「頼む、数学のノート貸してくれ。提出するまでは返すから

「また」

坂倉は呆れた顔をした。それも仕方ないことだろう。今まで俺は、彼女に何度も宿題のノートを写させてもらつていたのだから。

「悪いな。どうも数学だけは苦手なんだよ」

「はいはい、わかつたわよ」

坂倉は鞄から数学のノートを取り出すと、それを俺に差し出した。

「サンキュー。必ず借りは返すから」

俺はそれを受け取りながらいった。

「ちょっと待って」

坂倉に背を向け歩き出したところを呼び止められ、俺は首を捻り彼女を見た。坂倉は、なんだか照れているような顔をしていた。

「んつ？ どうしたんだ？」

いおうかどうか迷つていて、少しの間、彼女は口を開かなかつた。

「ごめん、やっぱりまた今度でいいや」

「なんだよ。気になるじやん」

「いいから。気にしないで」

坂倉は微笑んだ。

坂倉のおかげで、なんとか宿題を提出することができた。彼女の成績はクラスの中でもトップクラスだ。だから、解答に間違いはないだろう。数学が苦手な俺にとっては、宿題などの提出物で、点数を稼ぐ必要があった。宿題が出される度、毎度、彼女に写させてもらっているため、俺の数学の成績も平均を保てているのだ。

「あんた、今日ちゃんと学校に行つたわよね。途中学校を抜けたりしなかつた？」

玄関で靴を脱いでいると、母が怪訝な顔をして尋ねてきた。

「ちゃんと行つた。それに、抜け出してもないよ」

「そう」

母は納得のいかなさそつな顔をしていた。そして、続けて独り言でも呟くようにいった。

「おかしいわね。昼過ぎに見たのは一体なんだつたのかしら。間違いなく大輝だと思ったんだけど」

「どうかしたの？」

「昼過ぎに、ゲームセンターで大輝を見かけたのよ。しかも、制服じゃなくて私服だつた」

おそらく人違いなのだろう。昼過ぎといえば、俺は教室で昼食を食べていた最中だ。無論、学校を抜け出したりもしていない。その後、五時限目に提出しなければならない数学の宿題を写していたのだ。

「きっと人違いでしょ。俺は学校を抜け出したりしてないんだから」「そうなのかな」

依然として母の顔はぱつとしない。なにかもやもやとしたものでも残しているかのようだ。

「学校を抜け出して、ゲーセンに行くような不良じゃないって」

「それもそうね。きっと私の見間違いね」

そういうて、母は台所に戻つて行つた。

ズボンのポケットに手を突っ込むと、財布が無くなつていてことに気付いた。昨夜、確かにポケットに入れておいたはずだった。どこかに落としてしまつたのだろうか。だが、いくら考えても、思ひ当たる節はなかつた。財布には大してお金は入つていなかつたし、

高い財布でもなかつたのでまた買えば済むことだ。

一階の自室に行き、クローゼットを開けると、今度はお気に入りのワンポイント入りのティーシャツ一着とジーンズが一着無くなつていた。どうして、無くなつてしまつてゐるのか、俺にはさっぱりわからなかつた。仕方なく、他のティーシャツを着て、ジーンズを穿くことにした。

その後も、俺の周りではなにかが忽然と消えたりすることが続いていた。消えた物はそこら中を探しても、一つも見つからなかつた。俺にはそれらの原因がさっぱりわからずに入つた。ただ一つわかつていることは、全て日中に起つてゐることだけだ。

俺は暗い闇の中に立つてゐた。あの時と同じだ。そして、ぱっと視界が明るくなつた。黒い人の形をしたシルエットの影が、俺の目の前に立つてゐる。

「一体お前は誰なんだよ？ どうして俺の前に現れる？」

「前にもいつたことだ。一度も答える必要はないだろ？」

黒い影は、白い歯を覗かせ、笑つた。その瞬間、俺はぞつと、鳥肌が立つのを覚えた。

「だから、『俺はお前。お前は俺』ってどうしたことなんだよ。意味わからなつて」

「明日にでもわかるだろ？」

黒い影はそういう残し、光の中へと消えていった。

つるさい目覚まし時計の音で、俺は目を覚ました。背中はぐつしょりと、汗べたべたとなつてゐた。あの黒い影はなにがいいたいのだろうか。今日にわかるといつてゐたが、果たして本当なのだろうか。

「大輝こいつにこいよ

教室に入るなり、荻窪隼人に声をかけられた。俺は、鞄を机に置き、彼のところへ向かつた。

「昨日、坂倉とどこに行つてたんだ？」

隼人はにやにやした顔つきで訊いてきた。

「どこつて……どこにも行つてないけど

「とぼけんなつて。お前と坂倉が、手繋いで歩いてるところを見たんだからさ」

「はあ？ 人違いだろ。俺は昨日坂倉と会つてないし」

昨日はすつと家にいたのだ。本屋へ買い物に行つたときくらいしか、外出はしていなかつた。

「そんなはずはないぜ。お前に声かけたんだからさ」
依然として、彼の表情は緩んでいる。なにかを期待しているような顔だ。

「俺はなんて答えたんだ」

「彼女とデート中だつて」

隼人は俺のほうに顔を近づけると、周りの者に聞こえないように、声のトーンを落としていつた。

「えつ！ 本当……なのか？」

俺は確認するように、隼人に尋ねた。隼人は首を縦に振った。

信じられなかつた。坂倉に告白されたことも、俺が彼女に告白したこととも記憶にない。それに、昨日隼人が見たという俺は一体誰なのだろうか？

「で、昨日はどこ行つてたんだよ」

隼人はしつこく訊いてくる。

「だから、どこにも行つてないつて」

俺がいい終わると同時にチャイムが鳴つた。タイミングのよい、

救いのチャイムだ。それを機に、俺は自分の席に戻った。頭の中は混乱していて、どうすることなのか、さっぱりわからない。

ぼうっと、黒板を見つめていると、突然脇腹に激痛が走った。誰かに蹴られたような、強い衝撃と痛みだつた。そして、その衝撃と激痛は、一度三度と脇腹に感じた。その後に、左頬に強烈な衝撃を受けた。唇が切れたようで、口の中に血の味が広がつた。

すきすきと痛む脇腹を押さえ、机に顔を埋めた。突然のこと、誰に殴られたのかさえもわからなかつた。いや、誰も俺を殴つていないのだろう。それを裏付けるように、教室の中は何事もなかつたかのように、皆が黒板に目を向け板書していた。ブレザーを脱ぎ、シャツをめくつてみると、激痛の走つた脇腹に青痣ができていた。その夜、坂倉からメールが送られてきていることに気付いた。そのメールを見て、俺は驚いた。

メールの内容は、昨日彼女と遊園地に行つたことについてだつた。俺には身に覚えのないことだ。どうやら、隼人が俺を見たというのも嘘ではないかもしない。そうすると、もう一人俺が存在するということになる。だが、そんなことは有り得ないことだらう。

俺はメールを返信せず、翌日、坂倉と直接話そうと決めた。それに、結局、あの影がいつたことはわからず仕舞いだつた。

俺が屋上に行くと、フェンスの金網をつかみどこか遠くを見ている坂倉がいた。昼休みに、話があるといって、放課後屋上に来るよう呼び出しておいたのだ。

「なに見てんの？」

俺が坂倉の背中に向かつて声をかけると、彼女はゆっくり振り向いた。

「こっち来て」

坂倉に呼ばれ、彼女のところへと歩み寄つた。

「あの公園だよ」

坂倉は指さしながらいった。

「懐かしいな。小学生の頃、学校帰りによく遊んだんだよな」

「そうそう。覚えてる？ 大輝が鉄棒から落ちたとき、私が泣き叫ぶあんたを引っ張つて帰つたこととか」

「そんな」ともあつたつかな」

俺は苦笑した。

坂倉は笑いながら、俺のほうに顔を向けて。一瞬、彼女の笑顔にどきりとした。

「それで、話つてなんなの？」

「昨日のメールのことなんだ」

一九一九

遊園地に行つたのである。

「アーリーは、おまえの體たい體たいだ！」

ノルマニヤーの新刊

「記意障害でもあるの？」

「あら、おおじやなこと悪い。板繪といふときの記意がなーんだ

坂倉は小首をかしげ、なにか考え方でもしているかのような表情

をした。

坂倉の探るような質問に、俺はどきりとした。最近、身に覚えの

ないことが起こっていたこともあり、俺自身、一重人格であるのか
ちひれなーと思つていたのだ。

「アーティストの隠れ家」。これが「アーティストの隠れ家」。

「私と遊園地に行つたとき、大輝は私のこと坂倉なんて呼んでなかつた。麻衣子の名前を平吉といつたが、

「そつばのか？」

坂倉は頷いた。俺は彼女に対して、名前で呼んだことは一度もなかつた。

「游國也」

「遊園地に行つた日、隼人に会つたつてのも本当なのかな?」

うん、本當だよ。私嬉しかつた。大輝が誤魔化さず、本當のこと

「いつくれて」

本当のこととは、俺と坂倉が付き合っているということなのだろう。俺にはどういう経緯でそうなったのかはわからないが。

「俺たち付き合ってるのか?」

俺の言葉に、坂倉はまたしても驚きの表情を浮かべた。

「そんな……私が告白したことも記憶にないの?」

「ごめん。ないんだ」

「ひどい……」

坂倉の表情は悲しそうな顔に変わっていた。彼女の顔を見て、聞いてはいけないことだったのかもしれない、と俺は後悔した。彼女の悲しそうな表情に俺の胸は痛んだ。

「それじゃ、大輝が付き合ってくれるつていつたのはなんなのよ」俺は言葉を失った。頭の中が混乱していて、どう答えればいいのかわからなかつた。

「私のことどう思つてるの?」

坂倉は真っ直ぐ俺を見つめていった。

「それは……」

思わず彼女から視線を逸らししいい淀んだ。あと一言、言葉が出てこない。俺は、自分の中で答えを出せないでいた。

「もういい……」

坂倉は俺に背を向けると、走つて屋上を後にした。

俺は坂倉のことが嫌いではない。かといって、好きかと聞かれれば、素直にはいといえるかどうかわからない。ただの幼なじみとして仲がよかつただけで、彼女を恋愛対象として見てこなかつたからだ。複雑な気持ちで、やりきれない思いだ。

俺の周りで一体何が起こつているのだろうか？　夢に見る黒い影に、俺の周りで起こつている不可解な出来事。いくら頭の中を整理しても、まるで理解できない。もう一人俺が存在していると考えるのが妥当のようと思えるが、果たしてそんなことがあるのだろうか。一人取り残された屋上で、俺はフェンスの金網をつかみ項垂れた。

その瞬間、目を疑つた。

俺の影がなかつたのだ。空は夕空に変わりつつあるが、陽は出でいる。周りの建物や、グラウンドを歩く生徒たちにはちゃんと影がある。それなのに、俺にだけ影が存在していない。身体には特に変わつた様子はないが、影がないとはどういうことなのだろう。これも例の不可解な出来事に関わつてくることなのだろうか？

家に帰ると、俺はベッドに寝転がつた。身体が鉛のように重く、ひどく疲れているのがわかる。目を閉じてしまえば眠ってしまいそうだ。しみで黒ずんだ天井を見つめ、しばらくして目を閉じた。頭の中に、様々な不可解な出来事が蘇ってきた。唯一共通していることは、全ての不可解な出来事が日中に起こつていて、ことくらいだ。それだけではさっぱりわからない。

それに、坂倉のこと。幼なじみとしての彼女ではなく、男女の関係として向き合う必要がある。俺が答えを出さなくてはいけない。彼女に対する俺の想いはどうなのだろう？

しばらく考え込んでから、俺はベッドから飛び起きた。カバンから携帯電話を取り出し、電話帳を開け坂倉に電話をかけた。呼び出し音が四回鳴つたところで、彼女は電話に出た。

「なんなの？」

坂倉は突つかかるような、不機嫌そうな声でいった。

「えつと、『ごめんな。その……遊園地に行つたことや、坂倉に告白されたことが記憶になくてや』

「もういいよ。あの後考えてたんだけど、記憶がなくなつてるのは仕方ないことだもんね」

「それでさ、今度の日曜日空いてないかな？」

「日曜日？ どうして？」

「ほら、俺たち付き合つてんだろ。麻衣の予定が空いてるなら、どこかに出かけよう。それに、前に借りた数学の宿題の埋め合わせもしたいからさ」

坂倉を名前で呼ぶのは初めてだつたが、なんだか違和感を覚え気

恥ずかしくなった。電話越しにくすくすと坂倉の笑い声が聞こえてきた。

「なつ、なに笑つてんだよ」

「ごめん、ごめん。大輝つてさ、随分前のこと覚えてるんだね。私はつかり忘れてた」

「当たり前だろ。麻衣には課題出される度世話になってるんだからな。そういうわけで、日曜日頼んだぜ」

「わかった。空けとく」

坂倉は明るい声でいった。彼女の機嫌も直ったようだ。電話を終えると、俺はばたりとベッドに倒れこんだ。

「麻衣……か」

黒ずんだ天井を見つめ、そつと彼女の名前を呟いてみた。そして、目を閉じると、俺の意識はすっと遠ざかっていった。

小さな公園には誰もいなかつた。俺は公園の時計台の下まで行くと、時計を見上げた。時計は午前九時四十五分をさしていた。彼女との待ち合わせの時間まで、後十五分ある。近くのベンチに腰を掛け、地面に視線を落とした。俺の影は依然として戻らない。どうして消えてしまったのか、未だに答えも見つからない。

ふつとため息を漏らすと、青い空に田を向け、ぼつぼつと雲の流れを目で追つた。雲の流れと共に、雲の影も移動する。

「なにぼうつとしてんの」

目の前に突然大きな影が現れ、俺は我に返つた。

白いワンピースを着た麻衣が立つていた。彼女の姿に俺は目を奪われた。化粧を施した彼女の顔は、学校で見る彼女の顔とは程遠いように思えた。普段一重瞼の彼女も、今日は二重瞼になつていた。それに、いつも掛けている黒の眼鏡をかけていない。おそらくコンタクトレンズをしているのだろう。凛とした表情と、きりつとした二重瞼の彼女に、どこか清々しさを感じた。

「で、今日はどこ行くの？」

麻衣は俺の隣に座りながら訊いた。

「遊園地に行こう。俺の記憶がなかつた遊園地へ。無くしてしまった記憶を取り戻したいんだ」

「無理しなくていいのに。取り戻さなくつたつて、また新しい思い出を作つていけばいいんだからさ」

「それじゃ駄目なんだ」

俺は首を横に振りながらいった。

「俺の問題の解決にならない」

「大輝の問題？」

麻衣は怪訝な顔で俺を見つめた。俺は彼女に、これまでの不可解な出来事を全て話した。

」のまま記憶を取り戻すとしなければ、なにも解決しないだろう。俺の周りで起こっている不可解な出来事は、これに関連することに違いないはずだ。しかし、物理的に考えれば有り得ないことだと、頭の中ではわかつている。同じ時間軸の中で、一人の自分が別々の行動をするなんて考えられない。幽体離脱やドッペルゲンガーなどの、非科学的な考え方をしたくなかった。

「そつか。それじゃ、大輝の記憶が戻れば、全ての謎が解けるかもしないんだね」

「そうだな」

「それじゃ、行こつか」

麻衣は俺の手を握り、立ち上がつた。

俺たちが行つたらしい遊園地は、最寄り駅から三駅離れたところにあつた。そこからバスに乗り、十五分ほどで着いた。

その遊園地は雑誌にも取り上げられるほど有名な場所で、日曜日ともあり人で溢れていた。俺は麻衣と腕を組み、遊園地の中へと足を踏み入れた。

俺の記憶を取り戻すためといって、麻衣は以前俺と来た時と同じアトラクションを選択していった。しかし、俺には全て初めて目にするものばかりで、記憶の戻る気配は一向になかった。

「どう? 記憶戻りそう?」

一人で少し遅い昼食をとつていると、不意に麻衣に訊かれた。俺は力なく首を横に振つて答えた。

「そう」

麻衣は沈んだ顔をした。

「ごめん。やっぱそう簡単には記憶なんて取り戻せないのかな」

「焦ることないよ。きっと取り戻せるって」

「そうかな」

俺は苦笑した。麻衣はそういうものの、内心取り戻せないのではないかと思っていた。

昼食後も、いくつかのアトラクションを回つたが、結局俺はなに

も思い出せなかつた。いや、そもそも記憶を無くしてしまつたこと
自体が、間違いなのかもしれない。結局、なにもわからないまま遊
園地を後にすることとなつた。

待ち合わせ場所の小さな公園に戻ってきた俺たちは、ブランコに腰掛けた。午前中とは違い、公園には数人の親子がいた。砂場で砂山を作っている子供たちに、少し離れたところからベンチに座つて子供たちを見守る母親の姿。夕方の公園によくある光景だ。

「大輝つて、ジェットコースター苦手だつたよね？」

麻衣は確かめるように訊いた。

「ああ、苦手だ」

俺は高いところが苦手なのだ。それに、ジェットコースターとなると、スピードが加わるのだから尚更。しかし、今日は仕方なくそれにも乗つたのだった。

「今日の大輝、前とは別人のような気がした」

「別人つて？」

「前行つた時、ジェットコースターに乗ろうつて誘つてくれたのは大輝だつたの」

「俺から誘つた……」

ジェットコースターが苦手な俺が、そんなことをするはずがない。「だけど、今日は違つた。ジェットコースターに乗つた時、大輝はずつと怯えてたし」

「それじゃ、麻衣と行つた俺は誰なんだ」

「わからない」

麻衣は首を振つた。彼女の頭の中も混乱しているのだろう。

「確かに大輝だつたわ。だけど、今日の大輝とは違つた。やっぱり二重人格とかじやないの？」

「そんなはずはない」

俺はつい怒鳴つてしまつた。

「二重人格とか多重人格つて、本人には自覚がないものよ。それに

その時は記憶がないんだし」

仮に俺が一重人格としても、ほかの不可解な出来事は解決できない。突然身体に走った痛みや、忽然と物がなくなっていたりしたとの説明がつかないのだ。

しばらくすると、子供たちは帰つていった。公園に残されたのは俺たち二人だけだ。空は赤く染まりつづある。俺は立ち上がり麻衣の前に立つと、彼女の手を引っ張つて、公園の端にある大きな桜の木の下まで行つた

「これ覚えてるか？」

桜の木の幹に、二つの横線が刻み込まれている。二つの線には、三センチくらいの隙間がある。

「私たちが小学生のころに測つた身長だよね。確かに……小学四年生の頃だったかな」

「そう」

上に刻まれているのが麻衣のもので、下が俺のものだ。

「あのときは、大輝ちっちゃかつたもんね」

「今は違う。身長測るうぜ」

俺は桜の木の幹に背をつけ、背筋をぴんと伸ばした。麻衣は少し尖つた石で、俺の頭上に一本横線を刻み込んだ。次に、麻衣が桜の木の幹に背をつけ、俺が彼女の頭上に横線を刻み込んだ。

「少し目を瞑つてくれないかな」

麻衣はこくりと頷くと、目を瞑つた。俺は彼女の唇にそつと唇を重ね合わせた。柔らかな感触が伝わってきた。彼女は目を開けると、驚いた表情で俺を見つめた。

「これが俺の答えだ。俺、麻衣のこと好きだよ」

一言出てこなかつた言葉。俺が出した答え。今日、俺から告白しようとした決めたことだつた。麻衣からすると俺に告白して、俺から告白されたことになるのだろう。

「ありがとう」

麻衣は今にも泣き出しそうな顔をしている。俺は彼女をぎゅっと抱きしめた。

「『めんな、俺が記憶ないばっかりに悲しい想いさせて
「ううん、大輝の気持ち聞けたから、もうそれでいい
俺は桜の木に彫られた二つの横線に目を向けた。二つの線は十七
歳くらいの差がある。その二つの線は、俺と彼女の新たなスター
トラインが刻み込まれた証である。

家に着くと同時に、携帯電話が鳴った。電話は非通知となっていた。出ようかどうか迷つたが、俺はそれに出ることにした。

「鈍いやつだな。まだ気づかないのか」

電話越しに聞こえてきたのは、俺の声だった。

「お前、誰だ」

俺は電話に向かつて叫んだ。すると、電話の向こうから不気味な笑い声が漏れてきた。

「俺の正体も間も無くわかるはずだ。今頃そつちにお迎えが向かってるはずだぜ」

「迎えってなんのことだ?」

「それもすぐにわかることや」

俺の声の主はそういうと電話を切つた。

二階の部屋に行き、椅子に座ると唇にそつと手を当ててみた。まだ心臓の鼓動は高鳴つていて。先ほどの出来事を思い出すだけで、顔が火照つてしまつ。

少し前のことを見つけていた。玄関のチャイムが鳴つた。家には俺以外誰もいないので、仕方なく俺が出た。

玄関のドアを開けると、体格のいい男が一人並んで立つていた。初めて見る顔だった。一人は髭面で四十年代くらいの男だ。もう一人は、かなり若い。おそらく二十代前半だろう。一人いるのだから、セールスなどの類ではなさそうだ。

「君が赤羽大輝くんかな」

髭面の男が尋ねてきた。

「はい、そうですけど。あなたたちは

「私たちはこういう者だ」

髭面の男は懐から警察手帳を取り出し伊勢崎勝夫と名乗つた。それを見て、俺はどきりとした。この近くでなにか事件でもあったの

だらうか。

「警察の方がなんの用ですか」

俺が訊くと、二人の刑事は顔を見合わせ、ため息をついた。

「誤魔化そうとしても無理だ。証拠は出揃っているんだからな。君を強盗殺人の容疑で逮捕する」

伊勢崎は、俺の腕をつかむと手錠を掛けようとした。俺はあわてて彼の手を振り落った。

「ちょっと待つてくださいよ。いきなりなんなんですか。俺が強盗殺人犯なんて、そんなはずあるわけないじゃないですか」

「証拠は出揃っているといつただる。いくら足搔いても無駄だ。話は署でじっくり聞かせてもらおう」

一步後退したとき、若い男に腕をつかまれてしまった。俺はそのまま床に倒され、その後、若い男が俺の背中に乗りかかり俺は身動きが取れなくなつた。伊勢崎は、身動きの取れない俺に手錠を掛けた。

警察署に着くなり、俺は取調べ室に連れて行かれた。狭い空間で、警察と向かい合わなければならぬ。ここが、何人の犯罪者が罪を認めた場所なのだろう。今なら、彼らの気持ちが少しはわかる。間も無くして、伊勢崎刑事がビデオテープを持つて入ってきた。俺は伊勢崎をきつと睨みつけた。警察の暴挙に腹が立つていた。

「そんな怖い顔で睨むなよ」

伊勢崎は笑顔だったが、威圧的なものを感じた。この部屋に入れられて、隙を見せたら負けだ。

「俺はなにもやつてない。俺がやつたって証拠がどこにあるんだよ」「これを見ればわかるさ」

伊勢崎は、ビデオテープをビデオデッキに入れ再生ボタンを押しした。テレビに映し出されたのは、銀行だつた。俺には、見覚えのない銀行だ。時刻は今日の午後二時となつていた。少ししてから、俺は目を疑つた。銃で銀行員を脅迫している映像が映し出されたのだ。脅迫しているのは紛れも無く俺だつた。マスクや帽子などは被つて

おらず、一切変装は行つていなかつた。

テレビの中の俺は、銀行員が出した札束をカバンに詰め込んでいつた。銀行員は怯えた様子で俺のいうことに従つてゐる。現金を奪うと、俺は銀行員の頭を撃ちぬいた。そして、一人三人と手当たり次第人を撃つていつた。銀行内は血の海となり、銀行員を含め四人の人が殺された。

そのビデオに俺は違和感を覚えた。なにかが足りないようになつたのだ。しかし、それがなんなのかは、わからなかつた。

「この映像を見て、まだ言い逃れをするつもりか」

ビデオを停止させてから、伊勢崎はいつた。

「俺には身に覚えの無いことだ。だいたい今日の一時なら、俺にはアリバイがある」

「ほう、ならその話を聞かせてもらおうか」

伊勢崎は俺の向かいの席に座つた。

午後二時といえど、麻衣と遊園地に行つていた時間帯だ。俺はそのことを伊勢崎に話した。

「それなら、この映像はどう説明する？ もう一人お前が存在するトでもいうのか」

「それは……」

不意に先ほどの電話のことを思い出した。もう一人の俺の存在信じられないことだが、そう考えるべきなかもしれない。だとすると、俺は記憶など無くしていなかつたことになる。あの電話の主がいつていたお迎えとは、警察のことだつたのか？

「そう考えるしかないと想ひます。もう一人俺が存在するのでしょ

う」

伊勢崎はふつと吹き出し、大笑いした。

「ばかばかしい。そんなことあるはずがない」

笑いを止めると、伊勢崎は俺の顔を見ながら、

「君、ここまでおかしくなつたのか？」

と人差し指で顎顬をとんとんと一回叩き

ながら、馬鹿にするようにいった。

俺はバンと机を叩き、刑事を睨みつけた。

「俺にはちゃんとアリバイがあるんだ。信じられないことだけど、そう考えるのが妥当だ」

「お前が撃つた銃は、近くの交番の署員を殺して盗んだものだ。それも覚えがないのか？」

俺は首を縦に振った。今日一日は麻衣と時間を過ごしたのだから、それ以外のことをわかるはずがない。もつとも俺は罪など犯していないが。

「本当に君はやってないんだな？」

伊勢崎は真剣な眼差しを俺に向け訊いた。俺は刑事をしつかり見据え、やつていない、と答えた。

「わかった」

「えっ！ 俺のことを信じてくれるのか」

伊勢崎は煙草を取り出すと、吸つてもいいか、と尋ねてきた。俺は頷いた。彼は煙草を一本くわえると、火を点けふーっと白い煙を吐き出した。

「もう一度よく検討してみる必要があるということだ。この事件にはわからないことがあるまだある」

「わからないこと？」

俺は繰り返した。

「そう。銀行強盗をするなら、なぜ変装をしなかったかだ。普通銀行強盗などをする場合、捕まることを恐れて、なにかしら変装をするだろう。しかし、この映像を見るとなにも変装はしていない。しかも落ち着いた様子で、余裕があるよつにも思える。犯人は君の顔に変装しているのかもしれないが、ここまで精密に他人の顔を装うことは不可能だ。それに犯人が銀行を出てから、目撃されたという情報がないんだ。この銀行は国道沿いにあって、周辺も人通りが多い。しかし、聞き込みをしても目撃情報が一切ない。不思議とは思わないか」

「確かに変だ。それだけわからないことがあるのに、なぜ俺を逮捕したんだ？」

「仕方なかつたんだ。上層部の連中が逮捕状を出したからな。連中はこの映像を見ただけで君を逮捕することを決定した。まあ、俺も賛成した人間だがな。この映像を見る限りじゃ仕方の無いことさ」伊勢崎はビデオテープを持ちながらいった。確かにそのテープを見る限りでは仕方の無いことだ。

「さて話は終わりだ」

伊勢崎は灰皿で短くなつた煙草を揉み消すと立ち上がつた。

「俺はもう帰れるのか」

立ち上がつた伊勢崎を見て、俺はいった。

「それはできない。今は君が容疑者になつてゐるんだ。君のアリバイが明白になるまで自由はないだろう。えーっと、麻衣ちゃんといつたかな。彼女はちゃんと君のアリバイを証言できるんだろ」

俺は頷いた。

「それなら釈放もすぐだろ」

伊勢崎はにつと、黄ばんだ歯を覗かせた。しかし、次の瞬間、彼の表情は変わつた。

「いや……」

といつて、伊勢崎は首を傾げた。

「君のアリバイが証明されても釈放はないかもしけんな」

「どうして？」

間髪を容れず俺はいった。

「アリバイが証明されたとしても最大の謎が残つてゐるだろ

「最大の謎？」

俺は小首を傾げてみせた。伊勢崎は俺を指さしながら

「もう一人の君の存在だよ

といった。

「それが解けない限り、釈放はないかもしけん」

なるほどと思い、俺はがっくりと肩を落とした。しばらく刑務所

に閉じ込められそうだ。まったく無理無法なことだ。冤罪扱いに他ならない。

「あんたはもう俺を疑つていないのか？」

「目を見ればわかる。君の目にウソはなかつた。だから、俺は君の証言を信じることにするよ」

髪の生えた顎に手を当て伊勢崎はいった。

「これで君が犯人だと、俺の責任問題になるけどな」

伊勢崎は髪の薄い頭を搔きながら、取調べ室を出て行つた。

伊勢崎刑事のいう通り、俺は留置場に入れられることになった。留置場に入れられると同時に、もしかするともうここから出ることはできないかもしない、という不安が一気に胸の中に広がった。もう一人の俺の存在なんて、誰も信じることはないだろうし、科学的に立証することも不可能だ。俺自信でさえも、もう一人の自分の存在など信じたくない。

信じたくないが、ずっと頭に引っかかっている言葉があった。黒い影がいつ『お前は俺。俺はお前』という言葉だ。その存在を認めれば、この言葉にも納得できる。

伊勢崎によると、麻衣の証言は聞き入れられなかつたということだった。やはり、同じ時間軸の中で、同一人物が別々の行動をとっているということは考えられないらしい。警察は麻衣の証言よりも、物的証拠である銀行の映像のほうをとつたのだ。それが、正しいことなのだろう。証言よりも、物的証拠のほうが確かなのだから。

留置場に入れられ、一週間、一週間と月日が経つていった。無情にも時間だけが悪戯に過ぎていくだけで、事件に進展はないようだ。いや、捜査はすでに終わっているかも知れない。同じ顔の犯人は捕まっているのだから、捜査する必要もないのだろう。

ある日、留置場にいくつもの足音が重なつて聞こえてきた。ひんやりとした空間に、地下道を歩いているように響く靴の音。その足音は、俺の留置されているところで止まつた。俺が顔をあげると、伊勢崎と若い男の刑事が立つていた。

「朗報だ。君は釈放されることになった」

伊勢崎がいつた。

「釈放……真犯人が捕まつたんですか？」

自分でも情けないくらい、力のない声だった。留置されてだいぶと疲れきっているようだ。

「いや、犯人が捕まつたわけではない」

「それじゃ、なぜ？」

「新たな事件が起きたんだよ。犯人の顔はちゃんと防犯カメラに収められている」

それを聞いて、俺はまさかと思った。事件が起きて、俺が釈放されるとなると答えは一つしかない。

「事件を起こしたのは、俺だつたんですか？」

「そうだ。君が留置されている間に起こった事件なのだから、我々警察も混乱している。君の無実は明白となつたが、事件は洗い直しだ。全く、面倒な事件だ」

「今度の事件はどんなものだつたんですね？」

「コンビニ強盗だ。銀行強盗のときと同じように、店員は頭を撃ちぬかれ殺された。それに客が一人殺されている。捜査により、銃は以前に使用したものと同じということがわかつていて。これで犯人の持つ銃は弾丸がなくなつた」

いいながら、伊勢崎は留置場の鍵を外した。

銀行強盗で四人射殺し、コンビニ強盗で二人射殺した犯人の持つていた銃には六発弾丸が装填されていたことになる。さらに、警察を一人殺しているから犯人は七人の人を殺しているということになる。

「犯人の足取りはつかめているんですか？」

伊勢崎は首を振った。

「銀行強盗のときと同じだ。目撃情報などは一切ない」

「すみませんが、その映像を見せていただくことはできますか？」

俺は一人の刑事の顔を交互に見た。

「別にかまわんが、なにか引っかかることがあるのか？」

伊勢崎がいった。

「引っかかることというよりは、ちょっと気になることがあるんですね」

「コンビニのビデオを見て、俺の考え方なら、銀行のビデオを見

たときに感じた違和感が拭い去られることになる。

伊勢崎と若い男に連れられ、俺は取調室へと入った。伊勢崎は部屋を出て行くと、しばらくしてから、ビデオテープを持って入ってきた。

「これが問題のビデオテープだ」

といって伊勢崎はビデオデッキにビデオテープを入れ再生した。テレビに映し出されたのは、銃を構え店員を脅している俺だった。銀行の時と同様に、変装は一切していない。店員は怯えながら、レジのお金を鞄に詰め込んでいる。店員が詰め終えると、彼は銃の引き金を引き、店員の頭を撃ちぬいた。そして、店を出る間際に、客を一人撃つていった。

ビデオテープを見て、俺の違和感は拭い去られた。足りなかつたものの正体がつかめたのだ。そして、今まで起きていた不可解な出来事も全てわかつた。あとは、もう一人の俺をどう捕まえるかが問題だ。

「なにかわかつたことでもあつたかね」

真剣にビデオを見ている俺に、伊勢崎が訊いた。

「ええ。もうビデオを止めていただいても結構です」

伊勢崎はビデオを停止させ、俺に顔を向けた。そして、口を開いた。

「このビデオから一体なにがわかつたんだ」

「もう一人の俺の正体ですよ」

「なんだって！ それは本当か？」

伊勢崎は目を剥いた。

「はい。しかし、もう一人の俺を捕まえることは不可能でしょうね」

「どういうことかね？」

「部屋を明るくしてもらえますか」

伊勢崎は照明のスイッチを押した。薄暗かった取調室は、ぱつと明るくなつた。俺は立ち上がつた。

「俺を見てください。影が無いでしょ」

「どうして……」

伊勢崎は驚きながら、ぽかんと口を開けていた。もう一人の人間が存在するだけでも不思議だというのに、人間に影がないということまで目の当たりにしたら、驚きも隠せないだろう。

「そう、もう一人の俺の正体は、俺の影だったんですよ」

「そんなことが有り得るのか」

俺はため息をついた。

「今更そんなこといわないでくださいよ。これだけ不可解なことが起こっているんですから、不思議でもないでしょう」「それじゃ、犯人の足取りがつかめなかつたのは……」

「おそらく、周りの影と同化したんでしょうね。影の中を移動することができるんじゃないでしょうか。銀行強盗のほつのビデオも確認してみてください。犯人には影がないと思います」

「ああ、わかつた。だが、これじゃ犯人を取り押さえることは無理だな」

伊勢崎は考え込んだ。

俺は今までに起こつた不可解な出来事を思い出してみた。あの夢を見た次の日から、事件は起きていたのだ。全ては、俺の影の一人歩きが原因だつた。ゲームセンターで母が見た俺も、麻衣から告白を受けた俺も、隼人が見た俺も、全て俺の影だつたのだ。不可解な出来事が、全て日中に起こつていたのは、夜は影ができないからだ。陽がないと、影は行動することができなかつたのだ。

影の一人歩きを食い止める方法が、一つだけあるかもしれない。影と本体は一心同体だ。俺が自分の影に触れれば、俺の影は戻るのではないかだろうか？しかし、そうするには、やつが俺の目の前に現れなければならぬ。

伊勢崎に連れられ取調べ室を出ると、俺は釈放されることとなつた。警察署の入り口付近で、麻衣が椅子に座つて待つていた。俺は彼女の許へと駆け寄つた。

「どうしてここに？」

座っている麻衣に尋ねた。彼女はなにも答えず、俺に抱きついてきた。俺は優しく彼女を抱きしめた。

「伊勢崎さんが教えてくれたの。今日、大輝が釈放されるつて」

俺は後ろに立っている伊勢崎のほうに首を捻つて彼を見た。伊勢崎は、笑顔だつた。そんな彼に向かって、俺は軽く頭を下げる。

「大輝のバカ。心配だつたんだから」

麻衣の声は涙声だつた。

「それじゃ帰るか。なにか奢るよ。心配かけたからな」

麻衣は顔をあげると、微笑んだ。彼女の目には涙が含まれていた。

俺はそつと彼女に口付けした。

警察署を後にした俺たちは、小さな喫茶店に入った。ほんのりと、コーヒーの香りが漂う店内にはカウンター席に男が一人と、奥のテーブル席に若いカップルがいるだけだつた。俺と麻衣は、窓側の席に着いた。俺はコーヒーを注文し、彼女はコーヒーとサンドイッチを注文した。少ししてから、ウエイトレスがカップを一つとサンドイッチを運んできた。

「なんだか顔色悪そうだけど大丈夫？　だいぶ疲れてるんじゃない」

麻衣は心配そうに訊いた。

「そりや……一週間以上、牢屋にぶち込まれていたんだからな。あんなところ、一度と入りたくないね」

麻衣は、ふふふと笑つた。

「笑い事じゃないって。麻衣も入つてみたらどうだ。罪を犯せば経験できることだぜ」

「私はそんな罪を犯すような人間じゃありません。一生縁のないところね」

麻衣は周りを一瞥すると、

「大輝が釈放されたつてことは、真犯人が捕まつたつてことなの？」と声のトーンを落として訊いた。どうやら、彼女は本当のことを知らないようだ。俺は話そつかどうか迷つた。

「いや、捕まつてないよ。けど、俺の疑いが晴れたつてことだ」

本当のことは話さず、彼女を誤魔化すことにした。これ以上、彼女に心配をかけることはできない。俺の問題に巻き込むわけにはいかない。

「そつか。でもよかつた。大輝が釈放されて」
麻衣はそういうと、コーヒーを啜つた。視線を窓の外に向け、ほつとしたような顔をしている。

「ねえ……さつきから私たちつけられてない？」

「麻衣は俺のほうに顔を近づけると、小さな声でいった。
「つけられてるって誰に？」

「ほらあそこの人。新聞読んでるよにも見えるんだけど、さつきからずつとついて来てるよ」

麻衣は窓の外を指さした。俺はその指先を辿つた。帽子を深く被り、新聞を読んでいる男が立つていた。その男は俺の視線に気づくと、口をぱくぱくと動かした。誤魔化せ、といったように思えた。

「氣のせいだ。氣にすること無いって」

「そつかな、でもずつとつけてきてるんだよ」

「たまたま、同じ道だつただけなんじやないかな」

麻衣は依然として訝しげな目で男を見ていたが、それ以上なにもいわなかつた。

俺が釈放されてからといふものの、事件に進展の様子はない。それに、今まで起こっていた不可解な出来事もぱつたりと止んだ。嵐の前の静けさのようで、気味が悪い。次に、影の俺はどういったことを仕掛けてくるのだろうか。やつは未だに正体を現さない。

ぼうっと、窓の外を眺めていると、携帯にメールが届いたことを告げる着信音が鳴った。メールは麻衣からだった。内容は、午後に映画を見に行く時の、待ち合わせ場所についてだった。待ち合わせ場所は駅とのことだつた。

昼食を家でとつてから、俺は駅に向かつた。約束の時間を五分ほど過ぎて駅に着いた。

「遅いって」

後ろから背中を突かれ、俺は振り返つた。

「悪い」

「ほら、切符買っておいてあげたから」

麻衣は俺に切符を渡した。

俺たちは改札口を抜け、三番ホームに向かつた。麻衣に聞いたところ、映画館は三駅ほど離れたところにあるらしい。

ホームの階段を駆け下りると同時に、電車は発車していた。

「もう、乗れなかつたじやない。大輝が遅刻するから」

麻衣はため息混じりにいつた。そして、ホームの椅子に座つた。時刻表を見ると、次の電車は三十分後だつた。俺がそのことを告げると、麻衣は露骨に残念そうな顔をした。

「それじゃ、映画に間に合わないじやない。次の上映時間は三時間後だよ」

俺は腕時計に目を落とした。今から、三時間後だと次の上映時間は四時になる。

「まあ、いいじゃん。ゆつくりしようぜ。時間はあるんだしさ。そ

れまでどつかで時間潰してればいいだろ」「

麻衣は長いため息を漏らした。俺は自動販売機で、一本の飲料を買つと、一本を麻衣に渡した。彼女は、ありがとうといつてそれを受け取つた。

カラソと空き缶の甲高い音が聞こえ、俺は隣の麻衣の顔を見た。彼女が空き缶を落としたようだつた。彼女はどこか一点をとらえ、なにかに怯えていた。

「どうしたんだ？」

「なんで……あれ、大輝じゃない？」

麻衣の声は震えていた。彼女は反対のホームを指さしていつた。俺は彼女の指さすほうへと視線を移した。

そこには、不気味な笑みを浮かべながら俺たちを見つめている、俺の姿があつた。ワンポイント入りのティーシャツにジーンズを穿いている。一つとも以前に突然なくなつたものだ。俺の心臓は高鳴つていて、もう一人の俺が、とうとう姿を見せたのだ。

反対側のホームで、特急列車が通過するというアナウンスが流れた。彼は俺たちを見つめたまま、ぴくりとも動かない。

間も無く、特急列車がやつてきて、反対側のホームを通過すると彼の姿はなかつた。だが、彼は俺たちの目の前に立つていて。反対側のホームから、一瞬にしてこちらのホームにやつてきたのだ。俺たちの同じホームにいる人たちは、皆一様に驚いた顔をしている。

俺は立ち上がり、彼のほうに歩み寄つた。麻衣も立ち上がつたが、臆した様子で足を踏み出そとはしなかつた。

「どうもはじめまして、といつたほうがいいのかな」

彼は不適な笑みを浮かべながらいつた。

「いや、はじめましてではないだろ。俺たちは一度会つているんだからな。そして今日が三度目の再会だ」

彼はぱちぱちと手を叩いた。小馬鹿にしたようなその態度に、俺は少し腹が立つた。

「おやおや、あの鈍感な俺とは思えないね。そう、俺たちが今日会

うので三回目だ。もう俺の正体はわかってるんだろ」

「お前は俺の影だろ。今までの不可解な出来事は、全部お前の仕業だ」

「お見事」

「彼はもう一度、手を叩きながらいった。

俺は彼に手を伸ばそうとした。しかし、あと少しで触れられると いうところになつて、彼は消えた。俺は空を仰いだ。ちょうど、雲 によつて太陽が遮られたところだつた。

「おつと、危ない。あんたに触れられるわけにはいかないんだよ」

俺の背後で、彼の声がした。あわてて俺は振り返つた。彼は麻衣 の隣に立つていた。

「どうして触れられたら困るんだ？」

「影と本体は一心同体だ。あんたに触れられたら、俺はあんたの影 に戻されるからな」

やはり俺の読み通りだつた。彼に触れることをえできれば、俺の 影に戻るのだ。

「久しぶりだね。麻衣の告白を受けたのは俺だよ」

彼は麻衣に向かつて笑顔でいった。麻衣はなにもいわず、怯えた 表情を浮かべているだけだつた。

俺は、彼のほうに足を踏み出した。

「それ以上近づくなよ」

彼は、バタフライナイフを取り出すとそれを麻衣に突きつけた。 麻衣は逃げ出そうとしたが、彼に腕をつかまれ首にナイフを突きつけられる形となつた。

「それ以上近づくと、この女を殺すぜ」

彼はぺろりと舌を出すと、不気味に笑つた。

「大輝……助けて」

麻衣は泣きながらいつた。恐怖のあまり、彼女の身体は小刻みに 震えている。

「お前はもう俺に手出しできないぜ」

「それはどうかな。お前、リバーシってゲームを知ってるか？」

「なんだそれは？」

彼は問い返した。

「逆転ゲームだ。一見、優勢だったほうが、後半で逆転される」と

もあるゲーム。オセロのようなもんさ」

「それがどうした」

「この状況、どう見てもお前のほうが優勢だ。それをひっくり返してやろうってんだよ」

彼は大笑いした。

「この状況をどうやってひっくり返すってんだ。見ものだね。やれるならやってみろよ」

「いわれなくともやってやるさ」

俺は、周りを見回すと、数人の人物に目で合図を送った。そして、俺は自分の右腕に、勢いよく噛み付いた。

「いつてえ」

彼は、苦痛に顔を歪め、ナイフを落とした。その瞬間を見逃さず、麻衣は彼の手を振り払い俺のほうに駆け寄ってきた。それと同時に、俺が目で合図を送った人間が、彼の周りを取り囲んだ。取り囲んだ中の一人の男が、彼の落としたナイフを線路のほうへ蹴り落とした。

「どうだ、これで形勢逆転だな」

彼はちつと舌打ちした。俺の右腕からは、血が滴り落ちていた。右腕がじんじんと痛む。もう少し加減しておけばよかつた、と後悔した。

「お前らなんなんだよ？」

彼は、彼の周りを取り囲んでいる人間に向かっていった。そのうちの一人が警察手帳を出し、警察であることを示した。

「なんで、警察の人がここにいるの？」

麻衣は呟くようにいった。

「ごめんな、黙っていて。俺は記憶を無くしたんじゃなかつたんだ。

刑務所にいるときに、そいつの存在に気づいた」

麻衣は改めて、もう一人の俺を見た。未だに信じられないという顔をしている。

「そいつを捕まえるために、警察の方に協力してもらつたのさ」「そういうことなんだ。君のいうとおり、君を見張つっていて正解だつたよ」

彼を取り囲んでいる中の一人の男がこちらを向いていった。その男は、変装に使つていた帽子をとり、サングラスを外した。

「伊勢崎さん」

麻衣は、驚いた表情で、伊勢崎の顔を見た。

「じゃ前に私たちをつけていたのは、警察の人だつたの？」

「そう、麻衣が不審に思つっていた人は伊勢崎さんだつたんだよ」

麻衣はむつとした表情で、伊勢崎を睨んだ。伊勢崎は彼女の顔を見て、ごめんと謝つた。

「終わりだな。お前の負けだ」

俺がいい終わると同時に、四番線を特急列車が通過するというアナウンスが流れた。

「俺の負けじやない」

彼は、きっと俺を睨みつけた。追い詰められているといつに、その目には余裕が感じられた。

「この期に及んで、勝てるとでも思つてるのか？ 俺がお前に触れた瞬間、お前は俺の影に戻るんだからな」

彼はふつと笑みを漏らした。

「勝てるとは思わないさ。だけど、この勝負、引き分けにはできる」

彼は、一步一歩と後退していった。

「なにするつもりだ？」

俺の問いかけに、彼はただ笑つてはいるだけで、なにも答えなかつた。すると、遠くから特急列車が迫つてきてるのが俺の目に飛び込んだ。やばいと思い、俺が彼に飛び掛けた時には、彼は後方にジャンプしていた。

「あばよ

彼が特急列車に跳ねられると同時に、俺の身体に強い衝撃が走った。俺の身体は宙を舞い、身体のあちこちは引きちぎられ、頭からは頭蓋骨が割れるような鈍い音がした。一瞬の出来事で、痛みさえも感じない。

田の回る世界に飛び込んできたのは、麻衣の泣き顔に彼女の悲鳴だった。数秒後、俺の意識は、深い暗闇の中だった。もう光の世界には戻れない、深い暗闇の中。あいつと最初出会った時の暗闇を思い出し、俺の意識はなくなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7592c/>

分身

2010年10月8日22時25分発行